

## ノスタルジー

安藤 晃二

パラリンピック最終日の朝、朝食のテーブルでマラソンの放映に気付いた。ロスに永住し、オリンピックのマラソンで楽しみな東京の景色が見られると、伝えて来ていた息子の事を思い出し、迷わずフェースブックのビデオ電話のボタンを押す。急襲されて吃驚したロスは夕方5時、突然会話をすれば、まるで隣に住んでいるような感覚である。何とも便利な世の中だ。オリンピックのマラソンは札幌開催になってしまい、この東京のパラマラソンは、NHKによる国際中継が無いそうで、私の思い付きも目的を果たさず、見事はぐらかされた。そればかりか、息子の妻も何故か画面に現れず、家内にスマホを渡すと、たかが息子にスツピンが恥ずかしいと「照れ笑い」とは。教訓を突きつけられ、「今度お化粧してから」と強制終了となる。

ランナーの背景に日本橋再開発の高層ビル街の中、ポツンと茶色の旧野村ビルが骨董品の如く立っているのに気付いた。商事会社の新入社員時代が彷彿とする。夕方、毎日の様に御掘端の会社から走って野村ビルの一角に事務所を構える合金鉄メーカーに茶封筒に入れて手形を届けた。商社が金属クローム等製鉄の副原料を輸出用に購買する代金をメーカーにサイト付き手形で支払うのだ。相手の経理担当のYさんは、僕の到着を相好崩して迎える。何百万円、何千万円の「不渡りフリー」の手形の運び手が毎晩やって来る。その中、部屋に居る社長以下全員が僕に、ニコニコと視線を向け、遂に新入社員は「M商事のAさん」なる市民権を得たのだ。丸の内待機するお嬢様方の「お使い」の仕事はどうなる。しかし、僕の上司は頑なに新人の丸の内・日本橋間中距離走を主張した。いまその有難さが身にしみる。

その後何十年も海外に係わり、印象に残るストーリーを書いた。件の息子との電話で、「三か月前に『悠遊』送ったけど、着いた?」「ご免ねパパ、ゆっくり読むよ」。自分のノスタルジーをひとに押し付けていたのだ。教訓二である。